



イベント化関連資料

1. 「イベント化した単元」と「従来の単元」の指導計画
2. イベント化と発達段階
3. イベント化と評価規準と評価方法
4. イベント化の長所・短所

イベント化関連資料

1. 「イベント化した単元」と「従来の単元」の指導計画

イベント化は、小単元を追っての学習としていない。小単元を順に指導していく指導と一線を画す。それぞれの単元構想図の模式図を下に示す。（図1、2）

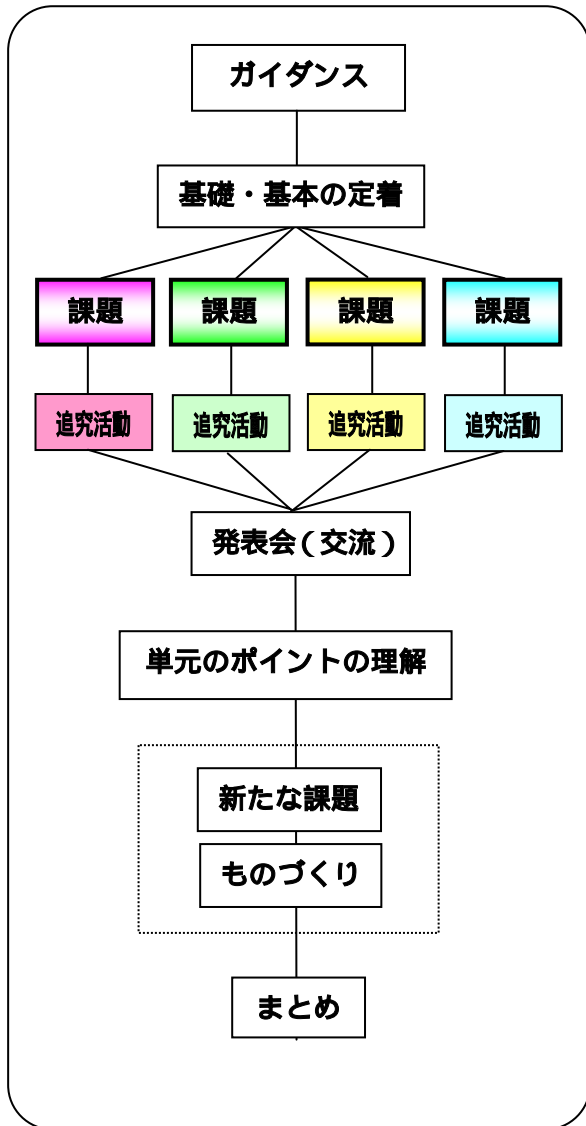


図1 イベント化した単元の構想図

単元全体の中から、課題を設定し、追究活動を行ない、その結果を発表会という形で交流する。

単元の基礎的・基本的な内容を説明する時間を別に設定し、知識の定着を図っていく。

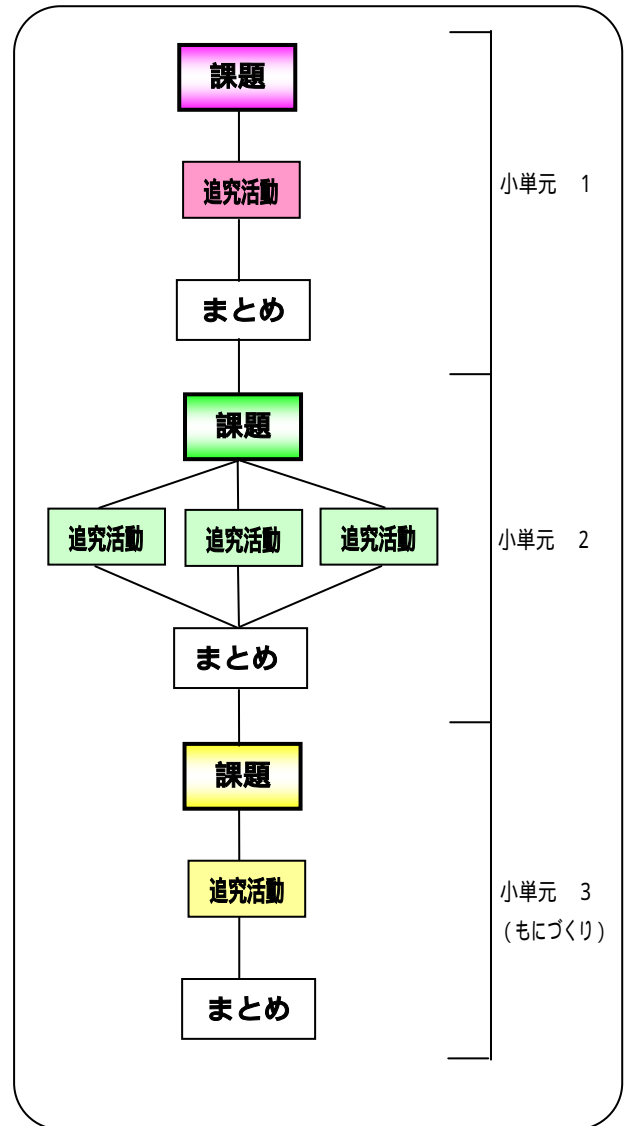


図2 従来の単元の構想図

小単元ごとに課題を設定し、その追究活動を行ない、その結果は、小単元ごとに交流する。

小単元ごとに、ポイントの説明を行ない、知識の定着を図っていく。

2. イベント化と発達段階

学年によって、イベント化の仕方も違って来る。ここでは、「イベント化12のポイント」について、発達段階との関連について表に示す。(図3)

ポイント	3年 (学年を問わず初めての取り組み)	6年
問題解決的な学習を計画の中心	教師主導で学習スタイルの獲得	主体的な取り組み
小単元に分けないで単元全体から課題設定	課題の例示	自ら課題を設定・発展的な課題設定
基礎基本の事項を教える時間の確保	- - -	- - -
ガイダンスの工夫	視聴覚教材の利用	単元で知っていることの話し合い
単元名の工夫	教師が考える	児童が考える
みんな博士! 的支援スタンス	・博士帽 ・名前もいっしょに掲示	・教師の説明に児童の名を盛り込む
パビリオン形式(発表形態)	1グループずつ発表	パビリオン形式
全員で作る掲示物	- - -	- - -
ゲストティーチャーとの学習	もの知り博士として	追究活動の支援
掲示空間の工夫	教師主導	児童主体
広報活動	・家庭や前項への活動内容の紹介	・関係する場所、諸機関の紹介
保護者への参加呼びかけ	発表会への参加呼びかけ	

図3 イベント化と発達段階

3. イベント化と評価規準と評価方法

イベント化した指導警句の学習活動についての評価規準を述べる。(図4)

学習活動	評価規準(「おおむね満足できる」状況)	
ガイダンス	<ul style="list-style-type: none"> 単元のおおまかな流れと内容を理解している (知・理) 調べたいことを見つけようとしている (関・意・態) 	
基礎的事項の理解	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的なことばについて理解している (知・理) 実験器具の使い方を理解している (知・理) 	
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> 自分で調べたい課題を見つけることができる。 (関・意・態) 	
計画書作成	<ul style="list-style-type: none"> 発表会に向けて自分でしていくことをまとめることができる (技・表) 	
追究活動	調べる	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に追求活動を行なっている (関・意・態) 課題解決のための手立てを考えることができる (技・表) 生活体験から実験結果を予想することができる (科学的な思考)
	実験・観察	<ul style="list-style-type: none"> 計画書にしたがって安全に留意して活動ができる (技・表) 実験結果から、自分なりの考察ができる (科学的な思考)
	まとめる	<ul style="list-style-type: none"> 自分の予想と結果、考察をまとめることができる (技・表)
発表会	<ul style="list-style-type: none"> 自分でまとめたことを級友の前で発表することができる (技・表) 級友の発表をしっかりと聞くことができる。 (関・意・態) 	
単元のポイントの理解	<ul style="list-style-type: none"> 単元のポイントを理解できる。 (知・理) 疑問点やもっと調べたいことなどを考えることができる (関・意・態) 	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 学習した内容を生活経験や既習の学習と関係付けて理解できる (知・理) 	

図4 イベント化と評価規準

評価方法

・発言(つぶやき) ・行動観察 ・ワークシート ・ノート ・評価テスト

4. イベント化の長所・短所

イベント化についての長所・短所について述べる。(図5)

イベント化の長所

自分の課題に対して取り組めるので一人一人の取り組みがよい
自分の課題解決のためにいろいろと考える(人に任せたりしない)・・・個々の能力に応じて
自分の課題の発表ということできっとしっかりとまとめ上げる
自分の課題について真剣に取り組むので、自分の課題の知識はもちろんのこと、他の内容も真剣に聞くようになり理解ができる (教師の補足説明のための一斉授業が必要なことは間違いはないが)
課題によっては、発展的な学習となり、個々の才能を伸ばすことにもなる (TTの効果的な活用)
クラスの一体感が生まれ、全体的に理解力がアップする
クラス行事を増やすことになる (学校行事の精選化に対抗)

図5 イベント化の長所

イベント化の短所

短所についてはその点を理解し、解決する手立てを講じる必要がある。

その具体的アイデアを述べる。(図6)

短 所	解決するための手立て
<p>単元全体から課題を見つけさせるので、教科書等に記載しているにもかかわらず、児童によってははしない実験が出てしまう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ お互いが調べたことを発表(交流)した後、もう一度他の実験を行なう時間と場の設定をする。 ・ 児童に、この単元においては初めから2つの疑問の解決を行なう計画であることを話しておき、違う内容の実験をさせていく。 ・ ワークシートを教室や廊下に掲示し、お互い実験の予想を書きこめる欄など設けて他の実験にも目がいくようにさせておく。
<p>それゆえ、自分が調べたところ以外は、知識が身に付かない</p> <div data-bbox="252 1406 555 1653" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="571 1597 970 1641" data-label="Caption"> <p>理科モンスターカードゲーム</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実験の前、交流後に基礎的な事項を説明する時間を確保しておく。 ・ 説明時に児童の心に残るような教材・教具を工夫する。 ・ 休み時間などでも学習ができるような、ゲームなどの遊びを盛り込んだ教材を用意し、知識の定着を図っていく。
<p>多種多様となる課題の把握や指導がむずかしい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ TTやゲストティーチャーなどを利用していく。 ・ さまざまな実験に対応できるような教師向けマニュアルを作成し、利用を図る。
<p>教科書に出ているような基礎的な実験・観察をしたい児童がいない時の対応をどうすればよいか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ あらかじめ、この単元で押さえておきたい課題を明確にしておき、児童の考えた課題が近いときには、基本的な実験をすすめていく。 ・ 児童の思い・願いを十分聞き入れながら、実験の資料を見せることなどにより、対話によって基礎的な実験をすすめていく。

図6 イベント化の短所と解決のための手立て

